

ふるさと、風

第102号 (2014年11月)

風に吹かれて (80)

白井啓治

『晩秋の月は冴え 最期の声鳴く蟋蟀』

異常気象と言われても四季は確実に移ろい来て、虫達の生滅も繰り返されていく。四季がなくなり雨季と乾季、夏と冬だけになったとしても生き物の生滅は四季に生きる生物群とは変わっていくのだから、繰り返されていくのだから。

時と共に変化・進化していく生物群の中において果たして人間どもには生き残っていきける生命力はあるのだろうか。世捨て人に近い日常を過ごしているのだから、些細な世の実相に触れる度、未来への希望が霞んで思えるのは歳の所為ばかりではないだろう。

庭の雑草を筆りながら地面を眺めていると、朝晩の冷え込みに、明日は土に還ることを自覚したように見える鳴き虫達がおぼつかない足取りで地面を這っている。霜降の月になって地面も淋しくなってきたなと思っていたら、数日前から突然小蟻の群が忙しく動き回り出した。

すわこれも異常気象の所為かと思ったが、そうではなかった。命尽きる虫達の骸を食い千切り巣穴に運んでいるのだ。思わず声してしまった。

「見上げたもんだよ屋根家の禰！」

狭い庭の自然ではあるが、そこに生きる者達には無駄はないのだ。見上げた生命力である。人間社会にもこの無駄のない見上げた生命力を信じて期待したいものだ。

しかし、昨今の人間社会の：日本社会の現実を眺めて見ると、刹那な我欲がはびこり将来への希望を考える力を見失ってしまっているように思えてならない。原発再稼働の話などを見てみると、これで果たして誰が得をするのだろうかと首をかしげたくなる。

原発を重大なベースロード電源とほざいているのは原発を持たない地にて高級住宅の地下にシエルターを作り金庫に食糧にもならない金を溜め込んでいる輩ではないかと思ってみたりする。

原発再稼働反対の一角を崩そうと川内原発を何とか再稼働させようとしている。賛成する地元住民のある声を聞くと、再稼働しないと町は潰れるという。飴を貰う事に慣れ過ぎてしまうと、創意工夫の人間力も退化してしまおうらしい。

地震学者、火山学者など多くの学者たちが危険を指摘している地域なのにも拘わらず、安全であると主張できる厚顔さは、自分達がそこには住まないからだろう。

東日本大震災で甚大な被害を受けた東北太平洋沿岸であるが、苛酷原発事故を起こした福島以外

ふるさと風の会会員募集中!!

会報「ふるさと風」も、お陰様で今年9月号で創刊100号を迎えました。ふるさと風の会では、「ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

の地域ではスローテンポではあるが確実に人知れ暮らしを紡げる場所に戻しつつある。しかし、福島原発周辺地域は何も手を出せないのだ。放射能を帯びた廃棄物だけが十分な処理技術もないまま山を作って、人間を笑っている。御岳山の噴火で多くの犠牲者が出た。火山学者曰く火山には登らないこと以外、噴火被害を防ぐ手立てはない、と。実に重過ぎる言葉である。

「種の寿命」を考える

菅原茂美

個体の寿命は、誰でも経験上、よく理解している。老化などが原因で個体は、いつかは死に至る。

しかし、「種としての寿命」は一体どれほど永続するものか。あまりにも遠大な予測など、見通しの立てようもない。勿論そのための準備など思いもつかない。しかし予測の立てようがないからと言って、この限られた地球上の資源を無制限に浪費し尽して良いというものではない。しつかり種の寿命というものがある事を念頭に、子孫が安全に暮らすためには、いま何が重要か？ 叡智を尽くして、人類の生き方を考えるべきである。

なお、個体死に関し、単細胞生物の多くは、細胞分裂で子孫を増やしていくから、個体として、事故（酸欠など）がなければ「死」はない。運がよければ、何億年でも生きられる。

とは言っても、地球の歴史を紐解けば、「石油」は、プランクトンなど、主に単細胞生物の死骸が何十億年もかけてできたもの。浅い海岸で増殖した微生物は、上陸すればDNAが破壊されるので、海水の中でしか生きられなかった。しかし紫外線から防御できる安全な海水も、酸欠や海底火山の噴火による硫黄噴出などのため、急激な酸性化による事故で、一斉に大量死滅を招く。かつて全生物の9割前後が死滅した事件は歴史上5回もあった。主に単細胞生物が死滅・沈澱して、圧力や、触媒により、原油の素となった。

一方、石炭は倒木などが積み重なって生成された。海中微生物が³⁰億年間もかけて吐き出した酸素原子が3個結合してオゾン層を形成し、太陽光中の有害な紫外線を吸収するため、地上に到達す

るDNA破壊光線は少なくなった。するとまず単細胞生物が上陸し、¹⁰億年ほど前、多細胞生物へと進化し、ついには樹木など高等植物となり、それが個体死して石炭の素となった。大雑把にいえば、石油・石炭の生成過程はこんなところである。

【人類が今日の繁栄に至るまでには、幾多の曲折があった。忘れてならないのは、海中の微生物が³⁰億年もかかって光合成で吐き出した酸素が地上²⁵km付近でオゾン層を形成。お陰で海中生物が上陸できたという事である。それゆえ、現在の浅はかな文明がフロンガスなどで、オゾン層を破壊するなど、絶対許される事ではない。

3・6億年前、脊椎動物の魚類は、真水の川を遡り、上流の浅瀬で、エラ呼吸するものが肺呼吸する形に進化した。胸鰭を前足に、腹鰭を後ろ足に進化し、湿地帯を這い廻る事ができた。これが両生類の誕生である。両生類↓爬虫類と進化し、2億年前、恐竜が跋扈する片隅で、恒温のネズミくらの大きさの「哺乳類」というニューフェースが登場し、色々な形態を獲得。特にモグラの類の食虫目の中から、我らのご先祖「霊長類」が誕生する。モグラもご先祖様である。霊長類は色々に進化を遂げ、「真猿類」へと進んだ。更にその中から大型の類人猿が発達し、オランウータン・ゴリラ・チンパンジーの順で枝分かれをする。最後に700万年ほど前、直立二足歩行する「猿人の元祖」が生まれ、原人↓旧人↓新人へと進化し、現在の我々ホモ・サピエンスが登場する。】

*

さてホモ・サピエンスという我ら新人は、今後どれくらい生き延びられるのか？ 今日のような生活様式を続けられれば、この狭い地球上で、あと何

万年ぐらい生存が可能なのか。人によつては、資源の枯渇や、環境汚染により、ヒト科動物としての生命力が低下しているので、せいぜいあと1万年生き延びたら良い方だ：という学者もいる。特に男性のY染色体はX染色体の10分の1で、消滅寸前の儂い命である。弱き者よ、汝の名は男なり。

人類は折角大脳を膨らましたというのに、自分が生活する環境に有害な物質を平気でバラ撒く。縄張り争いをする相手が、恭順の意を示しても、それを許さず殺害する事もある。非戦闘員までも、それを許さず殺害する事もある。非戦闘員までも、オランウータンとゴリラは極めて温厚な動物であるが、チンパンジーと人類は平気で殺し合いをする。こんなところを見ると、人類は少なくとも倫理が支配する崇高な動物ではない。向こう見ずの自分勝手。何の罪もない他の生物まで絶滅に追い遣る。DDT・PCBなど目先の利益に目がくらみ、善悪の判断がつかないお粗末な動物。そうは言っても人類は、悪魔の化身とだけは言いきれない。他の生物を根絶やしにするなど、悪い面は多く目立つが、多少は善良な面もある。文学者はきれいな言葉で人生を讃えている。勿論私は、純真無垢な青少年までをも、罵る気持ちは毛頭ない。庶民を抑圧し、ならず者が主権を握る事が問題だ。

*

さて問題のDDTについて考えてみよう。DDTは有機塩素系殺虫剤である。病害虫駆除のため、1939年スイスのポール・ミユラー(1948年ノーベル賞受賞)により作られた昆虫の神経毒である。確かに穀物増産や、感染症を媒介する昆虫退治に大きな貢献をした。だからノーベル賞も受賞した。しかし1962年、アメリカの海洋生物学者レイチェル・カーソンが「沈黙の春」で訴えた

ように、DDTは安定した化学物質で分解されず、自然界に残る。すると海まで流れて行き、プランクトン↓魚介類↓高等動物へと食物連鎖でハクトウワシの卵の殻が異常に薄くなり雛が育たない。

後には人体に取り込まれ、環境ホルモンとして内分泌系に攪乱を起こす事が分かってきた。環境ホルモンは、女性ホルモン（エストロゲン）類似の作用を起こし、アンドロゲン（男性ホルモン）の受容体に結合し、男性ホルモンの機能を阻害する。その結果、生殖器異常、生殖活動異常を起こす。デンマークでは過去50年間に、ヒトの精子数が半減したと報告している。

日本でもDDTではないが、環境ホルモンにより多くの問題が発生している。例えば、界面活性剤により、精巢が異常に小さい魚などが確認されている。更にゴミ焼却炉から出るダイオキシンが母乳中に高濃度に蓄積し、エストロゲン様物質で攪乱作用が見られ、更に、男性の精子数の減少が見られている。

なおDDTは、戦後進駐軍により、虱など退治するため、火山灰が降る如く、全身に大量に振りかけられた。お陰で今日では虱など、日本からほとんど見られなくなった。しかし、熱帯地方などでは、マラリアを媒介するハマダラカの駆虫に極めて有効であったが、今それはなく、依然としてマラリアは人類最強の感染症である。感染者は、毎年2億人増え、全体で8億人。毎年200万人が死亡している。マラリアはハマダラ蚊が終宿主であり、ヒトは中間宿主である。病原体が解明されて百年以上も経つのに、ワクチンさえなかったが、つい最近の情報では、2013年グラクソ・スミスクライオン社が、ついに抗マラリアワクチ

ンの開発に成功。日本でも阪大微研が間もなく世間に出せる段階に達したという。有効なマラリアワクチンが開発されたら、人類史上最大の貢献者と言える：と私は長年思ってきた。

人類が人工的に作り出した地球温暖化により、地上最悪のマラリアが、最も人口の多い中緯度地帯でも蔓延するしたら一大事である。国際機関がしっかりコントロールし、CO₂の排出基準を全世界に徹底して守らせるべきである。京都議定書を批准しなかった独善の先進大国もあつたし、発展途上国として言い逃れする大量発生国もあつた。そんな国に大面して威張られたのでは、たまつたもんじやない。人類の生残を左右する重大問題である事を、徹底して認識させるべきである。

マラリアを完璧に制御できれば、人類の将来に光明がさす。イタチごっこで、すぐ耐性を獲得する微生物に、人類の知能は追いつけないのではないか：人類が滅亡するとすれば、敵はエイリアンでも、ゴジラの復活でもない。あのちつぽけな、バイキンが人間の無能さをせせら笑って、天下を取るのではないか：と私はいつも思ってきた。

（もし愚かな人類が滅亡したなら、次世代の地球リーダーとして私はゴリラを推薦する。穏やかで紳士的な動物である。そしてゆっくりと彼等並の文明を繁栄させたら良い。拙速はいけない。）

私は仕事の上で細菌培養など随分やったが、いくら新薬を開発しても、すぐ耐性菌ができる。何の薬も効かない「緑膿菌」にとりつかれた乳房炎の牛を、泣く泣く処分した苦しみを思い出す。

そして調子込んで単細胞生物から多細胞生物に進化したため、人類は「がん」などという厄介なシステムを背負い込んでしまった。進化とは生存

に有利な面のみが発達するものではなく、要らざるものまでランダムに異常発達するもの。すでに滅亡したオオツノシカは、角が異常に発達して、生存に不利に働き、種としての滅亡原因となった。図体が大きくなると「大男、総身に智慧が回りかね」とよく言われるが、バイキンもそんな陰口を叩いて、人類をアザ笑っているような気がする。

ヒトの全細胞数は60兆個である。その各細胞の核の中に染色体（23対）があり、その染色体の中にDNAが30億個ある。ヒトの遺伝子の数はほぼ26000個。30億個のDNAのうち遺伝子を構成するDNAはわずか3%のみで、後の97%は、ジャンクDNA（イントロンと呼ばれ、役立たずのように言われてきた。しかし近年イントロンは遺伝子を構成してはいないが、遺伝子の調整役など重要な機能を有している事が分かってきた。さてなぜこんなくだいことを、長々述べるかというと、人体は26000個の遺伝子のみでは生きていけない。人体は己の60兆個の細胞の他に、共生する微生物が600兆個（主に消化管や皮膚）も存在し、これらの微生物の遺伝子の働きがなければ人は生存できない。人が生存に必要な自分の遺伝子の働きはわずか1%のみで、あとの99%は共生する細菌の遺伝子のおかげとも言われる。こんなことは、今から10年前の古い医学書には書かれていない。）自然界との共存あつてこそその人類の存在。薬剤の乱用は、人類の寿命を縮める。この事をしっかりと認識すべきである。頭が良いとか、美人だとか言っても、自分自身の遺伝子は1%しか役立っていない。後は日頃軽蔑しているバクテリアのお陰で命を支えてもらっている。神様は人類に対し「調

子込むんじゃないよ…」と叱っているような気がする。人類は永遠に戦争をやめようとしれない。悲しいかな単純な脳味噌の持ち主。

全ての生き物は利己的な遺伝子に支配されている。40億年前、この地球上に誕生した最初の生物が多分そうであったのであろう。全ての現生生物は、皆その子孫である。それゆえ自分の栄養を確保するために、縄張りを主張する。そして自分のコピーを増やそうとする。「食」と「生殖」のため全てをかける。それが生き物の本性である。そういう現実を見る時、人類は特別の存在でも何でもない。ありふれた単なる1種類の生物種である。

「自分とは何か？」と時には考えてみるのも大切な事。人間を理解するためには、歴史や文学・心理学などだけではなく、分子生物学をしつかり学ぶことも重要と考える。「心」は細胞内の生化学反応の結果であり、「恋」は細胞が分泌したホルモンの活動の結果である。頭の良し悪しや、身分の貴賤など、ナンセンス極まりなく「目糞、鼻糞を笑う」類の事…と、私は理解している。

【ここまで書いたら、青色LEDの開発に対し、日本人3名にノーベル物理学賞受賞のニュースが飛び込んできた。私は心から喜んだ。理由は商業主義の不要不急の文明が栄えている中で、LEDは省エネ・長寿命の照明灯。地球環境を汚さない優れたもの故、日頃敬意を払っていた。現在世界人口の2割(15億人)が電気のない生活をしている。その地域にLEDソーラーランタンが最近国際援助で普及とか。子供が夜も本が読め、喜んでいう。本当に人類に役立つ発明であった。】

さて前置きが長過ぎた。本論に入る。

現生人類の生残期間を推計するため、しつこいがデーターでその根拠を示す。大型類人猿まで進化した我らの祖先「猿人」は、アフリカ中部で、サヘラントロプス・チャデンシス(700万年前から600万年前まで生存) ↓ [中略] アルディピテクス・

ラミドウス(450 ↓ 440)までの4代が猿人である。年代が重複したり化石が発見されないため、欠落した年代もある。猿人時代が終了し、次にアウストラロピテクス・アファレンシス(370 ↓ 290) ↓ [中略] ホモ・エレクトス(180 ↓ 5万年前滅亡)まで4代の「原人」時代。そしてエレクトスから分岐した我らホモ・サピエンスの兄貴分に当たる「旧人」のホモ・ネアンデルタールシス(25 ↓ 2万年前滅亡) 1代。現在の我らホモ・サピエンスが生まれるまで化石が発見された人類の祖先は合計9代である。(チンパンジーと別れて700万年。10代のヴァージョンアップで、今日の人類に到達した。)

従って、700万年前の人類誕生から、我らの生みの親、エレクトスが滅亡した5万年前までの695万年を9代で割ると、1代平均77万年となる。(将来、化石発見があれば数字は変わる) 最も長かった我らの親エレクトスは175万年も繁栄を続けたし、我らの兄貴分のネアンデルタールシスはわずか23万年であった。我らホモ・サピエンスの残存期間は、平均値から推計すれば、すでに誕生して20万年を経過しているから77マイナス20イコール57万年となる。

さてこの57万年を「長い」とみるか、「短い」と見るかは、人さまざま。私は、非常に長過ぎると思う。なぜか? 今から13000年前、メソポタミアで、それまでの狩猟採集の流浪生活から、農耕牧畜の定着生活に入った時期を以って人類の

文明誕生とみるなら、あまりにも短時間で人類の生活様式は急変した。今後加速度的に文明進化が成し遂げられるとしたら、あまり利口ではない人類は、何をやらかすか知れたものではない。

現在の地球は「未来の子孫からの預かりもの」という概念から見れば、子孫が利用すべき地球資源を今の今、俺達だけが豊かで幸せに暮らせればそれでよい。未来の事など知るものか。こんな生活態度を続けられれば、地球が何個あっても足りない。人口コントロールができず、世界人口は毎年8千5百万人ずつ増え続けている。人口が過密になれば縄張り争いが増え、永遠に戦争が絶えない。

ならば現在の我々は何をなせばよいのか? 私に言わせれば、スローライフへの切り替えである。57万年生き延びようとするなら、相当の覚悟で、現在の生活様式を減速するほかない。文明の進化速度にブレーキをかける事。人口コントロールを国連などが、積極的に推進する。交通機関はスローテンポに切り替え。経済も、何が何でも右肩上がりに執着しない。環境ホルモンや分解されない殺虫剤など、危険な毒物を絶対に製造しない。これらを推進するため、国連はママゴト遊びのお巡りさんではなく、ならず者を捉える閻魔様として絶対的権力を持たせる事だ。閻魔様の手始めの仕事は23385発もある世界の核兵器を、早速全部廃棄させる事。破壊に向かって驍進する文明速度をゆるめ、子孫が永続するためには、現在我々は何をなさなければならぬかを、個々人が責任を持って真剣に考え、行動する事だ。

石岡にやってきてから少し気になっっている天狗のお話を数回にわたってしてみたいと思う。またこれは以前ブログに載せた内容を書き直したものであることをお断りしておきたい。

もともと天狗といっても子供の頃の「天狗の隠れ蓑」などという話やテレビや映画で心躍らせた「鞍馬天狗」など程度で特に知識があるわけではない。常世の国といわれたこの常陸国周辺を歩きまわっているうちに段々と天狗に興味を持ったのです。

天狗の起源は中国(インドという説もある)において地球に落ちてくる「流星」のことを言ったそう、中国の紀元前に書かれた「史記」に「天狗は、状(かたち)大奔星の如くにして声有り。地に止まるときは、狗に類(に)たり。随つる所、炎火に及ぶ。之を望むに火光の如く、炎炎として天を衝く。其の下の円きこと、数項の田処の如く、上兌(えい)なる者は則ち黄色有り」と説明があるという。

日本には、637年の日本書紀において唐から帰ってきた僧が音を立てて流れてきた流星を天狗であると言ったとの記述が最初だそうだが、日本に置いてはこの天狗の現象や姿は定着せず、平安時代になり空海などの密教思想や山岳信仰と相まっていつの頃から天狗が山の神とみなされ、一部では特殊な能力を持つ修験者などが天狗に転生すると思われるようになったと考えられます。神道などでは別な考え方もあるようですが詳しくは別に譲るとして、ここでは石岡周辺を散策している時に気がついた天狗の話を順に紹介します。

まずは天狗の姿の原型と言われている「猿田彦」

のお話です。猿田彦は日本書紀などの神話に出てくる神様で、神が高天原に降り立った後に、葦原中国(あしはらのなかつくに)までの道案内の神として登場します。

そしてこの猿田彦の姿が、天狗そっくりなのです。先日終わった石岡のお祭りでも行列の先頭を行くのが天狗姿の猿田彦です。祭りではこの前にヤタガラスの山車に乗った「富田のささら」という三匹の獅子が露払いをします。

また「染谷十二座神楽」や柿岡のジャカモコジヤンなどの神楽では天狗姿の猿田彦が登場します。猿田彦は神話の中では「鼻長は七咫、背長は七尺、目が八咫鏡のようだ」とあり、「咫(あた)」は長さの単位で、直径1尺の円周の長さを4咫としたという。1咫は0.8尺という。

中国後漢時代の1尺は約23cmほどだというので、背の高さは約161cm、鼻長は129cmとばかに鼻が長い。目にいたっては八咫鏡というので直径が50cm近い円になります。

猿田彦が天照大神の命により地上に降り立った神(邇邇尊)の道案内を終えると、天宇受売命(あめのうずめ)が猿田彦の生まれ故郷である伊勢国の五十鈴川の川上について行きます。そして名前を「猿女君(さるめのきみ)」と呼ばれるようになります。この猿女君も今の「おかめ」のモデルとされ、宇受(うずめ)は「かんざし」のことで、今の巫女のモデルともいわれます。まあ天の岩戸の前では胸を露わにし、腰の紐を下まで下ろした姿で踊っています。

さて、猿田彦は伊勢の海でおぼれ死んでしまいます。そのため神話では猿田彦は伊勢より北には行っていないのですが、ここ常陸にも猿田彦が祀

られた神社が多く存在します。つい先日千葉県銚子市の猿田神社にお参りしてきました。ここは地元では古く由緒のある有名な神社で、猿田彦の「彦」が付かない唯一の神社です。また石岡の大覚寺の少し先に桜川市「猿田」という地名があります。そして人の名前でも「猿田」という苗字は茨城県に特に多い名前だと言います。「サル」に「猿」の漢字を当ててしまったことで動物の「猿」を連想してしまい、本来の意味を理解しにくくなっているようです。

神話の猿田彦は道案内の神であるので「道祖神」として考えられ、江戸時代の庚申講との関係もいわれています。

このサルタヒコについては、この会に時々記事を書いて下さる縄文語研究家の鈴木健さんの「日本語になった縄文語」の中で「sa..前」「ta..にある」「ru..道」でこれから行く道であり、先導のことだと解釈されています。佐多岬などもこのサタから来ている地名とされており。

さて、天狗の話も奥が深くて神道などとも関係してくるのでなかなか理解ができないのですが、今回も単に猿田彦が鼻が長いと古事記などに表現されているので天狗の姿と表現されていますが、単にそれだけで天狗なのかということ。猿田彦と猿女君(天宇受売命)が夫婦になるという表現がどうも神話としては異質な感じがするのです。九州にいた民族と出雲にいた民族が結婚して伊勢に行く(神話では猿田彦の生まれは伊勢であるから、故郷に戻る)ということ表現しているようにも取れます。

そして船に乗って黒潮に乗り安房国(千葉房総)にやって来て、そこから那珂川に沿って上流に進出していく。その道案内がやはり猿田彦だったの

かもしれない。まあここは深くは追求せず、単なる民間に定着した天狗がこんなところにいると気がついたところを今後数回に分けて紹介したいと思います。

敬老会

伊東弓子

今年初めて敬老会に参加した。最初は「まだそんな年寄りやないわ」という気持ちで抵抗があつて、参加しなかった。その後三回ブランクがあつて、今年はお出かけて行って本当によかった。

九十歳に入った方、八十代の懐かしい方々にお会いすることが出来た。階段状の会場には心配だったが、足の弱そうな人達は前の平らな席に、元気な足取りの人は階段を登って座席に落着いた様子だった。小学生のコーラス、女性達のフラダンス、太鼓の演技など地域の人達の演技に感動した。主宰者が舞台上で席に着いているのは、勝手がちがうように思えた。

記念品や昼食は常会長の手で催しが行われている間に自宅に届けられた。重い物を持って歩くとは危険だ。忘れたりすることの心配をしての配慮なのだそうだ。有難いことだがどうなのだろう。

頂き物にけちをつける訳ではないが、毎年同じ物だ。美野里地区のある製品で良質の物だけれど市内には数々の産業があることを忘れてほしくないと思う。届け物がすんで戻ってきた常会長、区長さんが見送りに出てくれたことは、朝の出迎え以上に嬉しいものだった。

敬われ大切にされている者が批判ばかりしてい

てもまずい。触れてきた敬老の催しを思い出してみよう。

終戦直後は年寄の威厳も強く残っていたし、敬意の念もあつた頃だった。運動会など学校の催しには必ず老人の席と立札が立っていて、地域の婦人会の人達がお茶を出していた。あの頃から老人の種目は、玉手箱だった。その後「浦島太郎」とか「宝物ひろい」と変わったが内容は変わらない。私は、大きな輪でフォークダンスでもしてみたい気持ちがある。どこかで取り上げてくれないかな。

娘の頃、寺で年寄が集まっていたのを思い出す。住職夫婦が考え出したもので老人会の始まりだった。寺周辺のお年寄が本堂に集まって、同じ地域の女達が料理をし接待した。裁縫台や丸・四角の卓袱台を並べ、酒は勿論、魚、茹菜、煮豆、芋の煮転がしなどが盛られてあつた。

「小便を漏らした爺さんがいる」「酒が足りない」と怒鳴った」とか、何やかやと女達は文句を言いながらも毎日続けられていた。いろいろの思いからだろう。軍歌を歌う人が多かった。あの時の老人会の人はいもう一人もいない。

老人の日が出来てからあちこちの町や村で敬老会をするようになった。昭和五十年前後（玉里となつて二十年余り）私も婦人会の一員として毎年手伝った。工場地帯の景気もよく、農業も活気のある頃だった。中台池の傍に建つ湖畔センターが会場だった。村中のお年寄が集まってきた。みな若い時から知り合いだ。話しが弾んでいた。センターで料理を作り、私等は配ったり注文に応じて持ち運びした。勿論お酒も入った。舞台で好きな人や得意な人が歌う。それに合わせて踊りも出た。自分達で楽しむことが出来た時代だった。

ギター文化館

2014 CONCERT SERIES

- 11月 9日 里山と風の声コンサート 亀岡三典 (G)
- 11月16日 おがわゆみこ オカリナコンサート
- 11月30日 スペイン歌曲コンサート
黄子珊 (ソプラノ) & 角圭司 (ギター)

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、また大好きな雑木林に一滴みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel 0299-55-4411

「本当に酔っぱらいは嫌だね」助平じじいが困ったもんだ」と長い間には「こんな相手してられない」と敬老会が終わらない中に帰る人が出てきた。主宰者だからそうはいかないとある人と二人で残ることが多かった。その人はおおらかな人だった。園児の歌や踊り、婦人会の出しものが披露された。年を追うごとに見る形が増えていった。それでも都都逸、詩吟、民謡が大半をしめて賑やかだった。あれこれあつてもまだまだ人間同士の触れ合うことの多い催しだった。友達のお爺さん、お婆さんがいたり、幼い頃から知っているお年寄りが沢山いて会える楽しみが多かった。

子供が巣立って行って平成時代をむかえた頃、地区別に行くようになり下高崎は白雲荘を使用した。ごみ処理の熱でお風呂を沸かすという施設の大広間に一杯集まった。バスの送り迎え、ご馳走はお弁当と茶菓子。飲物は瓶一本に変わり、酒なしというふうに変った。舞台では女の人達の踊りも行われたが、専らカラオケに酔う人が競い合うようになった。企画担当の人によっては、手品なども披露されたこともあつて、目が点になっていて表情の人達だった。バスの時間や停留所のことまで責められて気分悪くして途中で帰った老人の後ろ姿は哀れだった。

その頃、老いを迎えた父、母のことをつい昨日の様に鮮明に覚えている。父は「七十、誰が行くんだ」と惚けている様に言っていた。次の年「惣一つあんは行くかな」と心待ちにしていたが、その前に亡くなった。母は始めから楽しみに身なりを整えて出かけて行った。

合併直前の頃、職員が弁当を自分達の分として取り分けているのを見て女性の会で猛攻撃したこ

とがあつた。行事の際計画の段階で数に入れてあつたのか、残り物を処分する扱いなのか不信を募らせた出来事だった。婦人会も「婦人」は差別語だとかで「女性の会」となったのもこの頃だ。合併した初年度は中央のやり方に腹が立った出来事があつた。行事の方法や内容が変わった筈だと問い合わせが一向に埒があかなかつたという。偶然も偶然玉里地区の議員が本庁の係の机の上で明細のしるされた書類を見つけたのだった。地区ごとやる、対象人数を出す、申請書を出す、場所、費用などを提出する。その上で補助金を出すという旧美野里のやり方その儘だった。それが玉里の方には届いていなかったというさまたつた。それからの実施までの忙しさは半端じゃなかつたと聞いた。

職場での敬老会は自分達が主催なので、大切に計画を立てた。お爺ちゃん、お婆ちゃん達は孫の行事への参加はとでも喜んでくれた。遠く他県にいた祖父父母が参加してくれた。一方同じ屋根に住んでいても若い人達から声かけがなければ知らないままだったりした。すべて祖父父母と両親と孫のコミュニケーションがうまくいつてる家族がはつきり表われる時代になった。若い父母が多くなり、よびかけもシルバーカーニバル。きらきらカーニバルとなつていった。家族の変化、長寿になつたことでお年寄の集まる場所も、リハビリ先や施設に変わったのでそこへ出かけていく機会をもつようになつたりした。

祝日の幾つかが今の時代に合わせてか？ 三連休の最後に移った。敬老の日もその一つだ。そこには祝日として定めた時の意味も忘れられ、子供達に伝えていく教えない。親子はせつせと休み

を喜んで出かけて行くだけだ。

沢山の敬老会に参加し、手伝いをし、計画実行してきた今、私も老人となつた。これは自然なことだと思いつながらも言うに言えないものがある。コマーシャルに踊らされて無理して化けなくてもと思いつながらも若さは羨ましい。体丈夫ねと言われても、絶対なる自信がある訳でもなく何か見つける心配が先に立つだけだ。多くの老人が積み上げてきた経験や話しを聞いてもらおう場所も人もいなくなつた。こういうことが残念だ。今やれることをやってみようぞと毎日動き回っている。

宛がいぶちの祝日や敬老会などなくてもいいと嘆きながら言つてはみたが、あつた方がいいだろうと考えるおとした。敬老の字に言葉に振り返つてくれる人がいる。老人を意識してくれる。敬老会しなくちゃということと地域の人が集まってくる。人のかかわりがうまれる。それが続くことで、続けることがいいことなので、そこに何か育つていくのだと思う。現代の姥捨山に連れて行かれないよう頑張ろう。

八坂神社の祇園祭り

兼平智恵子

八坂神社は、石岡が府中平村と呼ばれていた江戸時代に「村中の氏神」として、現在の中町の筑波銀行あたりに鎮座していたとされて居ます。

その当時の府中の町では、様々な祭礼行事が行われていました。その中で最も盛んに行われていたのが天王（八坂神社）の祭り（祇園祭り）でした。

常府石岡の歴史（石岡市教育委員会編）より、櫻井明

筆「祭礼の伝承Ⅱ常陸総社宮祭礼Ⅱ」の表「近世府中の主な祭礼の一覧の中から六月十三〜十四日八坂神社の祇園祭礼内容を抜粋。

Ⅱ十三日に神輿高浜へ出、此時祢宜は烏帽子狩衣装束、馬上にて御供す、当殿も納豆多ぼし（釜町末期以来の侍烏帽子の異称で寺院で作った寺納豆の曲物に似ている所から名付ける）狩衣を着し、同じく馬上にて供奉し、高浜明神の拜殿にて祈禱ある。是を御浜下りといふ、此日御帰神輿、守木町香取明神の拜殿を御旅所とす、是を仮屋といふ、翌十四日神輿本社へ入御、此日当町中より思い思いに作り物を出し鳴物を揃、警固の人々は羽織袴着し御供す、是を祇園祭りという、此日他所人も来りて参詣群集す、此夜丑の刻斗に流鏝ありて神事を納むⅡ

神輿は、厳かに格調高く華やかな行列を従えて高浜神社に至り、御浜下りを行いその日は帰路、守木町の香取神社の御仮屋に一泊、翌十四日の夕刻還御する。この十四日には各町から様々な風流物が出され、大きな賑わいを見せるのでした。

この神輿の御仮屋への泊りや羽織袴の着用等各種の風流物の登場等が現在の常陸國總社宮祭礼の原型が示されていると注目されます。この八坂神社は昭和八年總社宮に合祀されました。

御仮屋になりました守木町の香取神社は現在の金刀比羅神社に隣接する神社で、かつて石岡外城があったとされる石岡市の茨城カンドリの地に鎮座、天正年間（一五七三〜一五九二）に守木の天王跡地に遷座され、江戸時代には府中平村の天王祭の神輿の逗留する御旅所になっていました。この香取神社は明治三十九年に金刀比羅神社に合併され現在は稲荷神社が鎮座されています。

華やかな江戸時代、御旅所となりました現

在の金刀比羅神社の境内に、明治二十二年四月、石岡萬屋旅館に宿泊し句を残した正岡子規の句碑が建立されました。

金刀比羅神社の御祭神と筑波山に見守られた子規の句碑と金刀比羅神社と稲荷神社とお訪ねになつてみて下さい。

・青空にグー チョキ パーつわぶき

陽だまり微笑む 智恵子

風車の弥七

小林幸枝

事件になる前に印籠を出せば誰も悲しまないで済むのにと思いながら、大好きで観ていたテレビ時代劇「水戸黄門」。また復活しないかなと思つているのは私だけではないだろうと思います。

水戸黄門というと直ぐに助さん格さんが思い起こされますが、私は風車の弥七が大好きでした。水戸黄門の物語は、水戸光圀が名君であったことから色々な逸話が發展して作られた物語ですが、登場人物の一人である風車の弥七が実在した人物であることを知ってビックリしました。

風車の弥七は、松之草村小八兵衛がモデルになっています。小八兵衛は優れた忍者で、光圀のために尽力したということが「桃鶏雑話」に書かれているそうです。それによると小八兵衛は、光圀の厚い信望を得て、隠密として陰の立場から光圀を護り支え、水戸藩領内の治安の維持と藩政の安泰のため全力を尽くした人物であったと言います。雑話に伝えられる話では、「小八兵衛は盗賊の頭

領で、一昼夜に三十里に往来し、優れた忍者であった。後に捉えられたが、光圀により命を助けられ、生涯二人月俸を給せられた。その恩恵に非常に感謝し、私が生きている間は決して水戸領に盗賊は立ち入らせない、と誓い小八兵衛の存命中は水戸領には夜盗の心配はなかった。また小八兵衛は、領内や隣国の動静・変事を探り、光圀は領内に居ながらにしてその動静を知り得た」とあります。

小八兵衛の墓は、松之草公民館に近く、山麓にあり、その傍らには墓碑はないが小八兵衛の妻、お新思われる塚が発掘されています。

小八兵衛は晩年、仏門に身を捧げ、住居の南側にあった寺の住職となり、波乱に満ちた生涯を閉じたと言われています。

風車の弥七は、ドラマを面白くするための架空の人物と思つていましたが、意外な事実を知り放送はされていませんが、ますます水戸黄門の物語が好きになった。

【風の談話室】

こんなことを言うのはちょっと早すぎるが、今年の会報も当分を発行すると、残り一冊となった。時の移ろいは何んと速いことかと今更に思つてみる。

今月の、談話室はいつになく賑やかになった。

ヨイシヨ広場の田島早苗様が、100号記念祭の後すぐに原稿をお送りくださったのであるが、メールがどこかに迷走していたのか、それとも待機

状態の仮であったのか、十月号をお送りした後の十月十五日に、九月二十八日付のものと一緒に送られてきた。恐らく送信ボックスにあるまま実行されなかったのだろうと思うが、PCメールというものの、慣れないとなかなか思うように言うことを聞いてくれないよつである。小生もよつやく慣れしてきたところであるが、現代の利器に追いついていくのは容易ではない。

《ヨイシヨ広場》(陸平をヨイシヨする会)

「ふるさと風」百号祭に寄せて

田島早苗

心配していた天気も上々、会場が狭く感じられるほど来場者を迎えられ、大成功の百号祭でした。まるで自分のことのように喜んでいきます。一口に百回と言っても、会員のすべてが唯の一回も休むことなく調査と知識の裏付けに基づき、半端でない長い作品の投稿が続けられたのは特筆に値する快挙です。心よりお祝い申し上げます。

何時もの事乍ら会場を飾った兼平さんの素敵なお絵が雰囲気を優しく盛り上げ、皆さんの喜びに花を添えていましたね。

そしてオーブニングの万葉の舞の素晴らしさ、拝見する度に成長している小林さんに惜しみない拍手を送りたいと思います。人は自信を持つことによりこんなにも輝きを増すことが出来るのですね。一回りも二回りも大きくなった小林さんの今後が益々楽しみになってきました。

市川さんの講演は時代を見据えた内容の濃いお話で、皆さんが真剣に聞き入っている姿がとても印象的でした。

美浦村で初めて第九が公演されるとい話が出た時の村民の反応は賛否両論、千差万別でした。その頃、岐阜から美浦へ越してきて十五年余り、三人の子育てと会社勤めの明け暮れに疲れ果てていた私の心に一陣の涼風が通り抜けました。時間をやりくりして仲間に入れて頂き、週一回の練習日の夜は、家事も仕事も忘れていそいそと出かけ

「田島さん、合唱の練習をしている時はいい顔をしているね」と会社の若い合唱仲間に冷やかされながら、とても幸せなひと時を持つことが出来ました。

そして公演当日、会場を埋め尽くした村民達の惜しみない拍手を受けてフィナーレを迎えた時の感激と達成感の素晴らしさ、正に新旧村民が一体になった瞬間でした。これこそが「文化力がふる里を救う」のテーマそのものだと思います。

陸平貝塚を後世に残すために奔走された話になり、初めてその存在を知った時の感激と失望を思い出しました。

日本の考古学研究の原点の地だと聞いて、早速夫の尻を叩いて貝塚探策に出かけ、足の踏み場もないようなガサ藪に驚き呆れて声も出なかった事が忘れられません。それから間もなく有志が集まり陸平を守り育てようと「陸平をヨイシヨする会」が発足しました。会を結成した時は会員もそれなりに若く、張り切っていました。働き盛りの市川村長の思いを受けて、村民主導で始まった活動は、先ずガサ藪だった貝塚の篠刈りから手を付けたのですが、一筋縄では行かない大変なものでした。幾たびも老若男女が集い、汗を流して刈り取って集めた山の様な篠に火を付け、煙にむせながら将来を語って飽きなかったあの頃は皆の心が陸平を

守り育てる使命感に燃えていました。作業が一段落したらビール片手にお話も話はず、作業を繰り返すたびに連帯感も深まっていったのでした。(国の史跡になった今は火を付けて燃やすことも、ビール片手に談合することも)法度実に良き時代の心温まる思い出です。

思わず話が横道にそれてしまいました。

どんな活動でも既に出上がっている会に後から入るのはとても勇気が必要です。百号祭に来場された方々はそれなりに関心を持たれているのでしよう。一人でもお仲間が増えるといいですね。

次のステップに向けての更なる飛躍を期待しています。

さて、この田島さんの原稿を編集し終わった時、田島さんから新しい原稿のメールが飛び込んできた。嬉しいサプライズである。

親子五人の那須旅行

田島早苗

危ぶまれた天気予報が見事に外れ、「矢張り文化祭には雨が降らない」とすっかり安心顔の私は、大忙しのイベントを手伝いもせず、久しぶりに顔を揃えた親子五人の家族旅行としゃれ込んで高速道に乗っていた。

最近衰えの目立つ父親を気遣う長女のお膳立てで、三人の子供が忙しい仕事をやり繰りしてようやく実現した那須旅行だった。

この日しか都合が付かないという長女に合わせ文化祭をボイコットした私は、ボランティア仲間に対する後ろめたさも何のその、心は紅葉の那須へ飛んでいた。

去年の春先のボランティア旅行では、あまりの寒さに素通りしてしまい心残りだった那須サファリパークをバスで巡る。

係員の解説も楽しく、草食動物用の餌を買い求めて金網越しに与えたり、カメラを持って右に左に移動しながら動物に声をかけたり、すっかり盛り上がった車内。間近で見える野生動物の迫力について類が緩んでしまう。大きく開けた野牛の口をめぐって投げた餌も見事に逸れてここでも運動神経の悪さを暴露してしまった私。園内を一巡して野生動物の一端に触れた興奮覚め止まぬまま、次の見学先藤城清治美術館へ。

恥ずかしながら藤城清治画伯のことは何も知らなかった私は胸苦しくなるような感動に震えながら、広い美術館内をゆつくり巡っていた。

この常設美術館は藤城清治氏の七十年を超える創作活動の集大成として、平成二十五年春にオープンしたもので、そのモダンな建物はかつて別の美術館として使われていた。その建物を生かしつつ自らの作品に合うように再生させると言う、新たな挑戦でもあったとか。広い館内には初期から今日までの代表作百点以上が並べられ、幾条の小道に導かれ、訪れる者を影絵の幽玄な世界へ誘い込む魔法が施されているみたいだった。

少女の頃の自分に出会える風の又三郎の連作等々、メルヘンの世界に浮遊しているばかりではない、現実の世界と真正面から向き合った作品には少しも老いを感じさせない藤城清治の魂が息づいていた。東日本大震災へ復興の祈りを込めた『生きかえれフェニックス』の他、被災地へ足を運んで現実を描いた作品の数々には画伯の温かい眼差しが溢れ、改めて被災地の現状を思い起こさせて

くれる。圧巻は美術館のオーブンに合わせて制作された『魔法の森に燃える再生の炎』水槽と鏡を使った六メートルの大作で、八十九歳の人がこんなにも見事な仕事が出来たのかと、作品の前にくぎ付けになってしまった。

豊かな自然に包まれた庭園の一角に建てられたチャペルは建物からステンドグラスまで藤城清治氏のデザインしたもので自然の光が映し出す幻想的なシルエットに心が癒される。因みに撮影禁止の美術館内と違い、此処では撮影が許されている。

紅葉の見事な木々に囲まれたこの美術館を「生涯をかけて作り上げる」と言う藤城清治氏は九十歳の現在も、なお現役としてこの細やかな作業に、揺るぎないテーマを持って取り組んでいられる。

娘の友人が女将をしている『自在荘』はもてなしの心が隅々まで行き届いている、こじんまりした旅館で、美術館で童心に帰った夕食会は昔話で盛り上がった。(続く)

《読者投稿》

養生日記『不幸の中に幸を思う』 堀江実穂

私は、自分は世界で一番不幸な女だと思っていた。しかし、今ではその考えも大きく変わってきて、違う見方で自分を思うことが出来る様になってきた。

私は18歳の時に突発性右難聴で一ヶ月友部の県立病院に入院した。しかし、聴力は回復せず右耳は全く聴こえなくなり、今でも耳鳴りがしている。その時はショックで悲嘆にくれる日を過ごし

た。

しかし、幸いな事に左耳はよく聴こえ、人との会話がスムーズにできる。ピアノを弾いたり、フルートを吹いたりする事も出来る。カラオケも大好きで友達と出かけ楽しんでる。

6年前に統合失調症になり、仕事もうまくいけなくなり、自殺を図ったりするまでに混乱を起こしてしまった。しかし、家族からも病気に對する理解をして貰えず離婚となった。

宝物のように思っていた子供達とも会うことが出来なくなり、その時は地獄のどん底に突き落とされたような気持ちになってしまった。しかし、一人暮らしになってからは、自殺を考えるようなことはなくなりました。

母親の私への大きな慈愛の心が私を救ってくれた。母の私に對して懸命に示してくれる姿が私を気づかせ、変えてくれたのだと思う。今は会うことが出来ないけれど、将来、子供達が母親を必要としたときに精一杯の愛情を持って懐に抱いてあげればいいのだと考えられるようになってきたのである。

病氣そのものは言葉に表現できない辛いものがある。しかし、こういう辛さに對して自分を放棄して逃げ出そうとしないで、踏ん張ることではないか子供達の母親として色々な事を受け止めてあげられるようになるだろうと思っている。

病氣の始まる頃、一般の職場では偏見の目で見られ、避けられ、疎外されてきたが、今のデイケアでは、そうした疎外感はなく同じ障害を持つ者達と一緒に病をのり越えようという気持を継続けることが出来る。

不幸と感じてしまう中で希望を創りだすことは

大変な事であるが、幸せを思う気持は以前よりも強く持つことが出来る様になってきたと思う。

今月の読者投稿欄は大変賑やかになり、編者としては大層うれしい出来事である。

太田尚一さんには、時々ご投稿を頂いているのであるが、今回ご投稿いただいた文は、本来ならば市報などで取り上げて頂けると嬉しい話しなのであるが、投稿されたとしても、恐らく市報には取り上げては貰えないだろうな、と些か淋しい思いで掲載させて頂いた。

新市長に期待するもの

太田尚一

この四月初旬のこと新市長に二つの提案を行なったのであるが：どちらも地元郷土の文化財を子供達が学べる環境をととのえて、地元再生の為の人材育成につながるであろう郷土愛を育む施策である。

さすが新市長たちまち市民の提案に反応されて実行に移されると判断できる行動がとられたので大慶大慶と手を打ったのであるが、提案した市民が落胆したのは、一つは教育長の提案にすり変わり（四月十日市長日記）一つは対象者を大人にも拡大した府中塾・山根塾へと新市長自らのアイデア（茨城新聞記事）として変貌を遂げたためである。いつもいいとこどりの天才の新市長、是非・是非、市民目線の視点を大切にして欲しいと念願する次第である。

地元再生への一里塚でもある市民目線の重要性を認識されるか否かが新市長の評価のわかれめと

なるであろう。

恐らく読まれたであろう元美浦村長・市川紀行氏のご意見（「ふるさと」風「一〇〇号記念号第一部」）ともすれば淀みがちな「歴史と文化を誇るまち 石岡」は、この風（異見・批判も含めて）をどう受け止めるのか、或いは相変わらずやり過ぎすのか、ほんとうのことが問われる今後であるーと、重く受け止めるべきである。（一）内筆者補

これまでの首長にない歴史と文化に視点をもたれる新市長には、かぎりない期待を申しあげたい。

（二〇一四年一〇月）

さて今回の投稿では、当会にとって大変ありがたい話しが二本あった。

一本は、風の会のホームページをご覧頂いている方からのもので、本当は投稿という形で頂けたものではないのであるが、風の会にお寄せいただいた話しは出来るだけ紹介していこうと思つているので、若干の割愛させて頂いた部分がありますが、紹介したいと思つ。

ふるさと風の記事へのひとつの思い

（Web 読者のご意見投稿）

御誌をWebにて拝読させて頂いておられます。現在は神奈川県在住ですが、石岡出身の小生には故郷の風土を思い起こししらなかつたことを見いだす記事に興味がつきません。

Webサイトに『ご意見、メールはこちらへ』が設置されているので、ひとつのご意見をさしあげたいと存じます。

最近の3号に連載されている『先進国の奢り』

ですが、歴史、政治、宗教と総花的に挙げられて人間とりわけ先進国の侵略の残虐を述べておられます。しかし、取り上げられた事項は有名なアイテムばかりなので、多くの書物・論説がゆきわたっており、それだけ意見も多用な事項ばかりです。したがって、それらに1つの見解を述べても、ああこれは誰その主張だな、どこの国の政府の主張だな、というのがわかるものばかりです。その場合、ひとつの主張・視点を正しいとするのは、軽率の感を否めません。先に言いましたように、同人誌で自分のおかねで出版されているのですから、何を書いても自由です。そこに反対意見もあるのは著者の方も先刻承知のことでしょう。

問題となるのは、内容の浅薄さが御誌全部の価値を減じる危険があるということです。あえて「浅薄」という厳しい言葉まで使わせていただくのは、一例を挙げれば第101回の同記事の中に『博愛主義を掲げるキリスト教徒』という表現がありました。が、キリスト教国同士が20世紀に入っても戦争を続けておりそれぞれが正義は我にあり神の加護があると信じていた事実があります。またキリスト教を博愛という道徳に転化させているのは多く見られることですが、博愛は人間同士⇨白人のキリスト教徒同士のことであり、植民地の土人は人間ではないから対象でない。19世紀いや20世紀に入ってもその概念で動いていたのが欧米です。上の例はほんのひとつで、歴史認識には普遍的認識などありえない、というのが一般的知識人の常識であることを思い、堤防も蟻の一穴から崩れるの譬えに鑑みれば、浅薄な内容に御誌全部の価値に疑いを抱くやも知れず、などと考えここに一

意見をお送りさせていただきます。

さて以上が、ホームページに寄せられたご意見である。

色々なご指摘を頂けるのは、会としては大変うれしい事で、内容の如何に関わらず応援歌として受けとめてやる。

これは勝手な編集者としての感想なのであるが、web サイトへ頂けるご意見は、ツイッターなどとも違ってあるが本人の顔が見えないということもあってなのだろうが、「ご意見の述べ方が共通した流れの雰囲気があり、些か雅致に欠けるように思えてしまうのだが…」。

次に「紹介する合田洋一氏のご指摘又は、ひとつの論評・論説になっており、「ご指摘、「ご意見が作品になっており、「ご紹介した文を紹介できる」とは、編者としても嬉しく思うものである。

合田洋一氏の文は、打田兄に手紙文としてお送りいただきましたものですが、編者の独断で掲載させて頂いただきました。

日本列島の原住民

合田洋一

ふるさと風を拝読させて頂いて、残念ながら大変気になることがあります。それも日本民族の根幹に関わることなので、一筆啓上申し上げます。

それは、菅原茂美様の100号と101号のお話の中で、間違つて論じているところがあるのです。

「アイヌ民族が縄文時代の日本列島の原住民」とされているところです。

この論は、ひと昔もふた昔も前に（特に明治時代この論を論じる人がありました。しかしながら、

現在では名のある人類学者・考古学者・歴史学者ではないと思います。それを簡単に、大雑把に申し上げます。

旧石器時代に日本列島が大陸と陸続きであった頃、北方から人々がやって来ました。それが原日本人となった旧石器・縄文人です。そして弥生時代になって中国の江南地方や朝鮮半島又は南方からもやって来たのが弥生人です。それではアイヌ民族はとなると、弥生時代に突然に北海道に出現したのです。現在のところ、何処から来たのかは不明ですが、樺太（サハリン）・千島列島にも居ることから北方民族（シベリヤ）と思われる。

アイヌ人が縄文人と違うと言うという一例を挙げますと、北海道で発掘される擦文時代（本州では縄文時代）の人骨はアイヌではありません。また青森県の下北半島や糠部地方（三戸・八戸）で少数、発掘されているアイヌ人骨は弥生時代に北海道から移り住んだアイヌであると考証されております。

ところで、過去に「縄文人はアイヌ民族」とされたのは何故かと言いますと、飛鳥・奈良・平安時代には関東・東北地方に住む人達を蔑称で「えみし・えびす」と呼び「蝦夷」の字を当てましたが、平安時代中期頃から北海道に住んでいたアイヌ民族に対しても「蝦夷」の字を当て「えぞ」と呼んだのです。両方にこの蝦夷の字を当てたために民族呼称の混乱が起きたのです。

従つて、この頃の東北地方の住民はアイヌ民族ではなく日本人なのです。勿論、純然たる縄文人ではなく、弥生人との混血も進み現在の日本人と同じです。

なお、日本各地にアイヌ語と思われる地名が遺存していることも事実です。これについては、縄

文人もアイヌ人も同じ北方民族と考えられるため、言葉の相似があります。また、言葉は文化ですから各地に伝播することもあります。

そして、もう一つ不思議なこととして、沖縄の一部地域の人たちがアイヌと顔付きが大変似ていることが指摘されておりますが、これについてはまだ確論がありません。何れにしても、重ねて申し上げますが、日本列島の縄文人はアイヌではありません。

以上ですが、拙書「地名が解き明かす古代日本―錯覚された北海道・東北」（ミネルファ書房刊）で詳述しておりますので、ご参照頂ければ幸甚に存じます。

《こつば座だより》

演劇表現について（4）

白井啓治

7月に北海道のギタリスト亀岡三典君から「人に見せる演奏」ということも考えなければいけないかなと思つています。という話をメールに貰ったことで演劇表現について少し書いてみようと思つたものであるが、このシリーズは今回で終了としようかと思つている。そこで今回は、演劇表現、舞台表現を少し離れて、芸術表現の基本的な考え方についての私見を述べてみたいと思う。

藝術とは何か？芸術表現とは何か、などと論題を与えてみても的確に論ずることは非常に難しく、小生などの手になかなか負えるものではない。

しかし、今は退いたとはいえ脚本を書くことを生業として来、現在も舞台表現などを行っている

以上、独り善がりであっても、自分自身における回答を、曖昧であれ抽象的であれ持つていないと作品創りを行うことは出来ないで少し頑張つて書いてみたい。

そこで改めて自分自身に芸術とは、芸術表現とは、を問うてみると、そこには「心の模様を創ること」という自身の答えがかえってくる。

模様とは「様々なかたち・姿・あり様」を指して言うものであるが、芸術表現とは、自分の心の中に生まれた思いや感情を何かのかたちに託して表現したものということができる。何かのかたちとは、表現芸術一般をさす。

そして、芸術と呼ぶべき表現とは、作品として表現されたものに触れた人に、何らかの新しい心模様を喚起させる力を有していることが、その一つの条件であろうと思う。

心の中に生まれた思い・感情などを、創造の人物というかたちにかえて文章に物語化すれば文学・文芸となるであろうし、思いや感情を色彩や造形としてのかたちに求めれば美術となる。また音による旋律というかたちを紡げば音楽となる。

また文字に書かれた条件を借りてそこに自分の心のかたちを求め演技に表現すれば舞台や映画などにおける俳優表現になるであろうし、譜面に書かれた条件に借りて楽器表現すれば演奏という表現になるであろう。

何れにせよそこには「心の模様をつくる。心の容をつくる」という芸術があるということが出来る。そして心の模様・容をつくるには生きるという哲学をする事が必要であろうと思う。

自分で書いていながら頭が混乱してくるが、藝術を論ずるとこんな風になるのではないかと貧し

い知識、思考力ながら思う。

さて、聾者である小林幸枝に会った時、彼女の話す手話があまりにも舞踊的であり、その動作が舞台俳優としてのスケール感に満ちていることに驚き、思わず明日から私の所に来なさいと言ってしまったのであったが、今ようやく彼女と行う朗読手話舞が一つの芸術表現として出来上がってきたと思っている。

彼女の演じる手話舞が芸術表現としてまで高め得ると確信するその大きな切っ掛けとなったのが彼女の家にお邪魔し、ご家族の方達と会った時であった。彼女のご家族は全員聾の方で、家でのコミュニケーション言語は言うまでも無く手話であるが、その家族の皆さんと一緒にあった時、不思議な世界に足を踏み入れた感覚に囚われたものだった。

その世界とは、当然といえば当然なのであるが、話した言葉を聞くのではなく話した言葉を見る世界であったのだ。所謂「音見の国」に迷い込んだのである。聾者の方達の社会では、音とは聞くものではなく見るものなのであった。

それまでは小生、手話とは言いながらそれは文字言語の変容形だと思っていたのであったが、そうではなかったのである。家に伺った時、お母さんの好きなスポーツ番組を見ていたのであった。当然、音声はなく文字放送になっていた。音声がないので私はテレビがついていても何の気にもならなかったのであるが、小林君や妹さんは、お母さんにうるさくて話が出来ないからテレビを消せというのである。

家族のこの言葉を見た時、ここは「音見の国だ」と理解することが出来たのであった。そして「音

見の国」を知る事によって、朗読手話舞という舞台表現が一気に演劇化することが出来たのであった。

表現の表層と深層を音声言語か手話言語のどちらが受け持つという概念ではなく表裏一体に舞台上で、音楽でいうところの和声する発想を持つことが出来たのである。

朗読手話舞という新しい表現はまだ発展途上であるが、面白い表現形式になるであろうと思っている。今後は、賛同いただける音楽家の人達と手を組みながら交響曲的演劇を完成させられたらと願っている。

芸術とは「心の模様をつくる。心の容をつくる」と考えた時、模様や容をつくる素材は沢山あった方が幅と深みを持たせることができるだろうと思っている。

《一寸一言・もう一言》

|| 一寸一言 ||

ツタンカーメンの法則

打田昇三

私が見たのは数十年も前であるから現代は違ふと思うが考古学博物館内を警備する警官が親切で「撮影禁止」の場所へ誘導してくれたりした。

お陰で黄金のツタンカーメン王も良く見えた。

第十七王朝から第二十王朝ぐらいの再盛期エジプト王のミイラは盗掘出来ない「王家の谷」に埋葬されたが専門の盗賊は其れを上回る技術で根こそぎミイラを盗んでいった。ツタンカーメンは王の資格を削られた無名の王であり、更に王家の

谷の工事事務所が建てられたのが、偶然に墓の上であつた為に無事？で居られたのである。

王家の谷の工事は、総指揮を執つた長官が「只一人、誰も見ず、誰も聞かず」と言つて、普通では近付けない場所に於いて秘密裡に行われ、講じ関係者と家族は世間から隔絶されたデル・エル・メディーナと言う特別団地で役人の監視下に集団生活を行わされたと言う。其処までしても、墓所専門盗掘団には敵わなかつたことになる。

殆どの王墓が荒らされた中でツタンカーメン王だけが助かつて現代の考古学博物館の主役で居られる理由は幾つかあるが最大の理由は、此の少年王が全くの無名であつたことと、素性が曖昧であつたことらしい。世の中には、目立ちたがりの政治家なども多いが、後世に名を残したければ努力することだけはして、後はツタンカーメンのように静かにしていることである。

無花果(いちじく)の亡国

打田昇三

紀元前二四六年から百年間、ローマ帝国はフェニキア人(アルファベットの祖型を作つた民族)の植民都市カルタゴと地中海の覇権を争い、遂に是を滅ぼした。いわゆる「ポエニ戦争」であり、この勝利によつてローマは地中海を支配し世界帝国に発展してゆく。ポエニ戦争は大きく分けて前後三回の大戦になるのだが、第一次はシチリア島が、第二次はイタリア半島が主戦場であつた。

第二次で負けたカルタゴは、ローマ帝国に服従する形で独立を保ち、本土(アフリカ大陸の地中海沿岸部)に籠り豊かな土地を生かして農業国に徹し野

菜・果樹の生産に励んだ。カルタゴの農産物は当時の世界市場で評判が良く、いつの間にかシエラを独占するようになった。

ローマ帝国も農業国であるから両者は競合するようになる。或る時にローマ帝国の将軍がアフリカ大陸を視察に来て、食卓に出された無花果が大きくて余りにも美味なので産地を聞くと「カルタゴ」だと言う。「高がいちじく、されど無花果」此の将軍は敗戦国の侮(あなど)れぬ国力を察知して帰国後に「カルタゴ恐るべし」と報告した。その結果、カルタゴはローマ帝国に第三次ポエニ戦争を仕掛けられ滅ぼされたらしい。

日本も余り世界にデシヤバラナイほうが良い。特に目立ちたがりでトップに立つ人は……

「深層心理」に支配される

菅原茂美

芸術には全く疎い私であるが、美意識には、人類が歩んできた道のりと深い関係があると思う。何か美しいと思うその心の裏には、歴史的にそれを求める深層心理が働いているからであろう。サラブレッドは、人間が創つた最高の芸術作品。女体美は神様の最高傑作……とか。

私が真に不思議に思うのは、女性の腰の「くびれ」がなぜ美しいと思うのか？古より美人画などにも「すがり腰」がよく見られる。すがり(蜂)のように胴がくびれた姿がもてはやされた。楊貴妃はかなり豊満な肉体であつたようだが、ロンドンやパリの社交界では、ある年齢に達した貴婦人達は、ウエストを細く見せ、殿方を魅了する為に一番下の肋骨を外科手術で除去したという。それ

ほどまでして細く見せたい理由は、進化と何か深い関係があるに違いない。人類の祖先は進化の過程で体毛が消失した。するとボディラインが明確に見える。ウエストが細かったら、遠目にも彼女はまだ妊娠していない……と判断される。もしかしたら、俺の子供を宿してくれる可能性がある……と男心を刺激し、当然もてはやされたに相違ない。

テニスのシヤラポア選手の長い脚がなぜ美しい？私が思うに、人類の祖先は、樹上生活から気候変動で樹木が減少。地上生活をやむなくされた。あまり敏捷でもない新客は、当然ネコ科猛獣の格好の餌食。となるとナツクルウオークの3本足歩行から直立二足歩行となり、背伸びして一刻も早く敵を見つけ逃げるよりほかない。当然足が長く逃げ足の速いものが自然選択され、より多くの子孫を残す事となる。深層心理が足を長くした。人類は700万年かけて身長が1.7m伸びた。

最先端自動車の怪

菅原茂美

「絶対安全」などという事は、まずあり得ない事だろう。そういう中で、東海道新幹線が開業以来50年間も走り続けて死亡事故が一度も起きなかつたという事は、正に世界に誇れる日本の技術と言えよう。新幹線開業の際、すでに開発されていた最先端の技術はあえて使わず、その一歩手前の確立した技術でスタートしたのだという。そういう「ゆとり」が、あの安全性をもたらしたのであろう。

さて、トヨタなどが鎬(しのぎ)を削っている「自動運転の車」。高齢者などが目的地をインプットし

てスタート。何事もなければこんな便利なものはない。地方問題も見事に解決。ところが最も心配される事は、ハッキングで遠隔操作され、車ごと誘拐される恐れがあるとの事。新技術開発には、常にそれを上回って悪用する「ならず者」がいるという事。

次は、「ドライブレコーダー(車載用カメラ)」の話。2013年2月、シベリアで隕石が落下し、鮮明な映像が世界中に送信された。予測があつたわけでもないのになぜあんなきれいな写真が撮れたのか真に不思議な話であつた。理由は自動車事故が起きた時、ロシアでは常に当事者間の権力の強いものに有利な判決が出るので、一般市民は防衛策として証拠提出のため、誰でも車載カメラを設置しているのだ、あの写真が自動的に撮れたのだという。日本でも交差点内事故などの証拠用として、最近かなり売れ始めたという。しかしデジタルデータは加工ができるので、警察や保険会社は、必ずしも証拠として全面的に取り上げない場合もあるとの事。

||もう一言||

河馬と王様

打田昇二

ツタンカーメン王の事を書かせて貰ったから別な王朝の王様を紹介して置く。第十八王朝の前、第十五、十六王朝は、かつてエジプトの王に雇われていた外国人傭兵(ヒクソス)が建てた王国である。この王朝に支配されていたテーベ(ルクソール)の豪族はセケンエンラー二世と言つた。テーベにはアメン神殿がある。ナイルから水を

引いて神殿の池に河馬を飼っていたのだが、或る時に第十六王朝の役人が来て「テーベの河馬の鳴き声がウルサイと、都の王様が言われたから処分をしろ!」と命じられた。王様は六百キロも離れた場所にいるので、河馬がバカでかい声で鳴いても聞こえる訳が無いのだが、賄賂でも欲しくて言い掛かりをつけたのである。このことで頭に来たセケンエンラー二世は敢然として王朝に反旗を翻し、ヒクソスと戦つた。

エジプト考古学博物館に頭を斧で割られた王様のミイラがある。それがセケンエンラー二世のもので、勇敢な戦いをしたかどうかは分からないが、ヒクソスにやられたのである。テーベ候には二人の息子が居て、兄はヒクソスに宣戦布告しただけで病死してしまい、弟のアアフメスが戦争を引き受け、自暴自棄で戦つて勝つてしまった。この王が第十八王朝を開き、その子・アメンヘテプ一世は撃退したヒクソス王の娘を娶り、パレスチナの権益を手にした。「王家の谷」を造つた王である。

「忘れた頃に:」

菅原茂美

災害は忘れた頃にやってくる(寺田寅彦の言)と言われるが、富士山噴火(864年)から仁和地震(87年)まで23年間に巨大地震・噴火が1回も起きた**貞観地震**(869年)は、忘れる暇もなく連続したようである(日本三代実録)。

今回の御岳山噴火も去る3・11からわずか3年半なので、これも東日本大震災と一連の地殻変動とみなせば、忘れる暇もなく、予測できたはず。ならば噴火の兆候は多少あつたのだから、警戒を

怠つたのは今更ながら悔やまれる。阿蘇・富士・鳥海山など列島に47座もある活火山は、いつ噴火してもおかしくない。東南海地震も同じ事。火山列島に住む我々は、心して生活すべきである。

海のない埼玉県が本気で「津波対策を検討」と報じられた。それは東日本大震災で、津波は北上川を49kmも遡つたという記録から、江戸川を30kmも遡れば、埼玉県的主要都市が軒並み。どんな対策が講じられたかは知らないが、海のない県が、津波を警戒する智慧は、あつばれである。

一方海に面した東京は直下型地震で、15層級の津波に襲われたら、地下鉄や地下街をどうやって守るか? 直下型地震なら、地盤に亀裂が入り、そこへ流れ込む津波は防ぎようがなからう。ポンプアップで排水? 停電は必定。たとえ電力が確保できたにしても、排水する河川は満水のはず。

そこで私の提案*「東京一極集中回避策」:

①霞が関の一角に原発を建設②住民税を100倍に③ヒートアイランド現象で越冬蚊(ヒトスジシマカ)を生かさぬため冬季の暖房禁止④オスプレイ飛行場は東京湾を埋め立てて建設。危険なものは地方に建設し、都民はヌクヌク。それはいかんぜよ! 危険と安心は、自給自足が原則。

さて今月はずいぶん賑やかな風の談話室となつた。この談話室がもつともつと賑やかとなり、この会報そのものの名を「風の談話室」とでも改称するほどになつていつつも思つておいてあげます。談話室への投稿は、毎月20日が締め切りです。どんな内容であっても当分の掲げている「ふる里の歴史・文化の再発見と創造を考へる」に外れるものではないと考へておきます。

【特別企画】

打田昇三の『私本平家物語』

巻第二 (2-2)

小教訓 (こぎょうくん) のこと

「平氏打倒計画」の実行委員長とも言うべき西光法師が拷問の後に処刑された話に次いで「小教訓」が出て来ると、平清盛が幾らか反省をしているのかと思っただが、全く其の様なことは無く清盛さんは益々意気盛んであり此の場合の「小」は一章段置いて出てくる「教訓状こと大教訓」に対する小教訓らしい。この章段の主役は清盛の後継者・平重盛であり、主役級の悪役は、西光法師が逮捕される直前に身柄を平家屋敷・清盛邸に拘束されていた新大納言・藤原成親である。

藤原成親先生については、既に「鹿谷」などで紹介済みであり、その妹が平重盛夫人であるほか一族と言って良いほど平家に近い人物のだが、現代の国会に送り込みたいような野心満々で調子だけが良いお方である。今ならば幾つかの政党を渡り歩いたり、お子様劇場並みの政党をつくったり或いは外国で日本の不利になるようなことを発言していれば良かったのだが、平家全盛時代では目立つことが難しい。そこでお騒がせが好きな後白河法皇が冗談半分に企画した「平家討伐」に賛同して筆頭株主になり、柄にも無く軍事面の指揮を執る予定になっていたのである。

しかし世の中は難しいもので、折角の計画も清和源氏系・多田蔵人行綱の裏切りと密告に依って水泡に帰した。平家物語に依れば真っ先に捕らえられた

のが藤原成親であり牢屋並みに頑丈な格子戸が嵌められた一間に押し込められていた。清盛も平家に関わりのある人物なので審理を後回しにし、主犯格の西光を処刑してから、じつくりと成親を締め上げるつもりでいた。楽しみである。

そう言うことで新大納言こと藤原成親は平清盛邸の一間に押し込められ(監禁され)たのであるが、幾ら清盛に招かれて出て来たとは言っても謀反人であるから冷暖房完備の部屋では無い。夏の暑さで汗をかき一方、鹿ヶ谷で決めた「平家討伐」の密議が漏れたことを薄々と察したから「是は誰が漏らしたのであろうか?あの時に呼ばれていた北面の武士の誰かであろうか?」などと冷や汗の出る無駄な密告犯人の推測などをしていた。

すると牢座敷の後の方から荒々しい足音が聞こえてきたので「これは(清盛の命令で)武士たちが自分を殺害に来たのでは無いか」と生きた心地がしない。覚悟を決めていると、後の戸が開けられ(成親の居る部屋からは開かない)其処には涼しそうな白絹で仕立てた無紋の短い法衣を付け裾口を広くとった袴だけの軽装で木鞘の太刀を持った清盛が怒りを含んだ顔で成親を睨んでいた。成親は其の威勢に圧倒され、真っ先にしなければならぬ言い訳も出来ない。其の様な状態の成親を睨みながら、清盛は怒鳴るように言った。

「そもそも、貴方は過ぎし平治の乱に謀反人となり、処刑される身でありながら内府(たいふ)清盛の嫡男である内大臣の重盛が自分の身に替えて命乞いをしたから辛うじて首がつながった身であるぞ!それにも関わらず(その恩を忘れて)何の恨みも有ってこの平家一門を滅ぼそうとするか!受けた恩を知る者を人間と言ひ、恩を知らぬは畜生と言われる...然しながら、

貴方には残念な結果だが、未だ平家の運が尽きず、この様な状態で此処に貴方を迎えている。こうなつた上は今回の謀反計画を包み隠さずに白状して貰おう!」

弁護人は居なかつたが発言の機会を得た藤原成親は此の時を置いて弁明の機会は無いと、清盛が要求した謀反計画には触れずに「...それは全く私の知らないことで」と、現代の裁判でも定番になっている「罪状認否」で先ず嘘をついた。さらに凶々しく「他人の讒言(ざんげん)言いがかりです。どうか良く御調べ下さい」と申し立てた。然し、全てが判明しているのだから成親の言うことは虚しい。清盛は「誰か居らぬか!」と近くに控えていた家臣を呼んだ。

先に源仲綱が密告して来た際に、清盛から最初に緊急命令を受けた平貞能が顔をのぞかせたので清盛は西光の自白調書を持って来るように命じ、その調書を成親に何度も読み聞かせた上で「憎い奴め!これでも未だ言い訳をするのか!」と怒鳴りながら、呆然としている成親の顔に大事な公文書を投げかけてから障子を荒々しく閉めて出て行った。それでも腹に据えかねるよう「経遠(瀬尾太郎)、兼康(難波次郎)を呼べ」と命じた。

この二人は巻一「殿下乗合」で清盛の命令に忠実に従って摂政の藤原基房に乱暴をした人物のようであり、平家の「汚れ仕事」担当なのであろうか。程なく呼ばれた二人が来ると清盛は「あの男(成親)を庭に引き落とせ!」と命じた。庭に引き落とすだけならば、この二人でなくても良いのでは?とも思うが、平家物語は任務分担が厳しい。

通常ならば二つ返事で引き受ける仕事なのだが清盛から命じられた瀬尾と難波は困った。庭に叩き落

そうとする相手が社長の親戚だからである。幾ら會長に命じられても、出世の事を思うと社長に恨まれでは出世に響く。そこで恐る恐る「小松殿(平重盛)の御意向は如何なものでしょうか？」つまり藤原成親は重盛夫人の実兄であり、また成親の子・成経は清盛の弟・教盛の婿でもあるから、平氏一族に近い関係にある。そういう人物を庭に叩き落とした場合、どう転んでも出世に響く。

銀行員と違って「引き落とし」を拒む二人の態度に激怒した清盛は、ひねくれ根性も有って「：：そうか、そうか、己らは内府(重盛)の命令を重んじて、この入道が言うことを軽視するのだな！それでは仕方が無い」と不貞腐れたように言う。

公務員やサラリーマンが一番に困る場面であるが瀬尾と難波の両名は即座に計算して清盛が未だ死なないと判断し、藤原成親に近づいて荒々しい態度で成親を座敷から庭に引き摺り落とした。

清盛は御機嫌を直して心地良さそうに見ていたが追い打ちをかけるように「ぶつ叩いて悲鳴を上げさせよ！」と言う。これでは手抜きが出来ないけれども、瀬尾と難波は成親の耳許で「苦しうに痛そうに喚いてください」と演技指導をしてから押し倒すようにして叩いたり抑え込んだりしてみせた。成親は言われたとおりに二声三声悲鳴を上げたのである。清盛は座敷の上から見ている。

成親の演技が素晴らしかったので清盛は満足したけれども、傍からみると其れはまるで死後の世界において、罪人の靈魂が人間社会の罰として閻魔大王に裁かれ、手下の牛頭人などに折檻(せっかん)を受けているように見えた。

次に原文は「：：蕭樊(しょうはん)囚われて韓彭(かんほう)にらぎすされたり。兆措(ちょうそ)戮(りく)

をうけて周儀罪せらる。喩(たと)えば蕭何(しょうが)・樊噲(はんかい)・韓信・彭越・是らは高祖の忠臣なりしか共、少人の讒(ざん)さんによって過敗の恥を受く共、か様の事をや申すべき」と書いてある。小難しいだけで何の事か分からず、また平家に関係が無いと思われるが、是は平家物語お得意の古代中国の歴史を教訓にしている記事である。藤原成親は平家に恩を受けながら背いたので中国の例を引く迄も無く日本には「自業自得」という言葉があるけれども、原文に従って概略を記しておくことにする。

先づ蕭樊では蕭何は韓元

前百年代に高祖・劉邦を助けて漢王朝に尽くした功臣であるが、王朝の邪悪な人物により罪無くして投獄の憂き目を見た。「韓彭」は韓信と彭越で韓信は股くぐりの伝説で知られる。共に転戦の功が有りながら王の側近によって罪人とされ処刑されてしまった。原文に「にらぎす」とあるのは、殺害された後に遺体が塩漬けにされる残酷で非人道的な刑罰らしいが、日本では其処までしない。

そして「兆措(ちょうそ)」は前漢第六代、景帝時代の学者で御史大夫という監察官のような職に就いて構造改革を提唱したのだが反対派(改革されては困る連中)に反乱罪を押し付けられ、制服を着たままで斬られた。「周儀」は西暦四百年代、中国南朝系「宗」の人で直臣(邪悪な心無い官僚)として知られていたが、日本で言う参議の地位にあつて無実の罪を着せられた。此処に挙げた人々は何れも忠臣であつたのに、つまらない悪人どもの讒言(ざんげん)中傷によつて不幸な運命を背負わされる事になつてしまった。古代中国の英雄豪傑と「つまらない人物」に分類しても良いような軽率で卑怯な藤原成親とは比較にならないが、平家物語は気の毒と思つたのか同列

に扱っている。次に登場する平重盛に遠慮したのかも知れない。

英雄豪傑でも忠臣でも無い藤原成親は、思いがけずと言うより必然的に平家屋敷に抑留されることになり、自分の運命もさることながら、息子の丹波少将(丹波守に兼ねて右近衛少将に任官されていた)成経以下の親族たちが幼い者を含めて、平家からどの様な処置を受けているので有ろうと心配ではあつたが、それを自分で確かめるすべも無かつた。其れでなくても暑い季節なのに完全な正装をして来た俣で監禁されてしまったから着替えることも出来ず、風の通らない部屋の中で不安と暑さと体調不良とで汗も涙も流れるばかりであつた。そうした中で唯一の希望は、妹の夫である内大臣の平重盛が何とか助けしてくれるのでは無いか？ということであつたが、それをどの様にして重盛に伝えたら良いのか、清盛の館に監禁されている身では連絡の手段が無い。

その重盛は、一連の騒動から暫くして嫡男の権亮少将維盛(こんのすけしょうしよう)これより皇居つき役所の幹部で右近衛府の少将を兼ねる)を後部座席に乗せ(牛車の場合が主が前席)近衛府の供四、五人と大臣の隨身(規定による供の武士)数人を従えただけで武装した兵は一人も連れず落ち着き払つてやつて来た。迎えに出た平貞能が下車した重盛の傍につつと寄つてきて「是程の大事に、なぜ軍兵どもを連れて来られなかつたのですか？」とたずねると、重盛は悠然と「大事とは天下の大事を言うのであつて、この度のように平家の私事は大事とは言わない！」と毅然として答えたので、周りに居た兵たちは武装しているのが場違いのように思えて、急にそわそわと落ち着かない様子を見せたのである。

清盛邸に入った重盛は、先ず捕らわれた成親がど

の部屋に居るのかと、此処彼処の障子を掛けて調べている中に、入口を始め四方八方を蜘蛛の糸のように木材で組んだ部屋が見つかった。此処に違いないと開けてみると成親が居たのだが、床に身を伏せ泣き腫らした目で呆然としていたから、気がつかない。重盛が「大丈夫ですか！」と声を掛けただけで、ようやく気が付いて疲労の中にも嬉しそうな様子を見せた。正に地獄で罪人共が地藏菩薩を見た時も此の様な状態であつたろうと思われて哀れであつた。なお仏教では釈迦が入滅した後で弥勒菩薩（みろくぼさつ）が出現するまで地獄に落ちた罪人は地藏菩薩が救うとされている。

重盛の姿を見た成親は此の時とばかりに釈明を始めたのだが、無実を主張して清盛に否定された後であるから今度は「哀願方式」に切り替えた。

「…どうして分かりませんが、この様な目に遭いました。（重盛殿が）お居を下されたならばと、そればかり念じておりました。こうしてお目に掛かれたからには、どうか私を御見捨てにはならないようにお頼み申します。平治の乱でも罰せられるところを、重盛殿の御恩をもって首が繋がりました。そのお蔭で歳四十余りにして正二位の大納言にさせて頂き、この御恩には生まれ変わっても報じられなく思っております。もし、この度も助けて頂いたならば、出家入道して高野山金剛峯寺なり粉河の天台寺なりに籠って、死後の成仏が出来ますように勤めたく思っております：」

其の様な殊勝な心掛けの有る者は軽々と謀反計画など思い付かない筈ではあるが、重盛は身内であるから全てを大目に見て「誠に其の様なお考えならば（父・清盛も）お命まで取ろうとはなさらないでしょうし、もし其の様な事態となつても私が居れば何とか

出来るでしょう：」と気休めを言つて座敷牢を後にしたのである。重盛は直ぐに清盛に会つて次のように申し入れをした。

「藤原成親卿の処分については、慎重にご検討ください。あの家は先祖（曾祖父）の修理大夫（しゅりのだいぶ）建築担当部門の次官・頭季が白河法皇に召し使われて以来、成親が前例にない正二位の大納言に昇つて、当代の君（後白河法皇）には大のお気に入り者です。その様な者を即座に死刑にするのは如何なものでしょうか。都から追放するぐらいの処分が宜しいと思います。かつて菅原道真公は藤原時平の策謀により西海に汚名を流され、西宮の大臣と呼ばれた源高明公（醍醐天皇皇子）は多田満仲（清和源氏の祖）の讒言（ざんげん）により恨みを山陽の雲に残すことになりました。お二人は無実であつたのに流罪にされたのです。これは醍醐天皇及び冷泉天皇の道義に外れた行為と言われています。これは昔のことですが、末代とされる現在でも未だ賢王にも誤りは有り、まして臣下の者は如何なることで誤りを犯すかも知れません。藤原成親が既に拘束されている上は処刑を急ぐ必要も無い筈です。古書にも、刑の疑わしきは軽んぜよ。功の疑わしきは重んぜよ、と有ります。今さら言うまでもありませんが、重盛は彼の大納言の妹を妻とし、維盛（重盛の嫡男）もまた成親の縁者であります。その為に命乞いをすると思われるかも知れませんが、そうではありません。飽く迄も世の為、皇室の為、そして平家の為を思つて申し上げております。先年、今は亡き少納言入道信西が権力を振るつていた折に、かつて嵯峨天皇以来（藤原薬子の妻以来）二十五代の天皇の治世に行われなかつた死罪を保元の乱で復活させました。宇治の悪左府と言われた保元の乱の首謀者・藤原頼長の遺体を掘り起こして罰

したことが行き過ぎた行為として非難されたことを覚えておられますか。その為に昔の人は、死罪を行えば海内（かいだい）国（の内外）に謀反が絶えない：と言ひ伝えております。この言葉のとおり二年経つて平治の乱が起ると、首謀者の信西は難を避けるために自分の領地内に穴を掘つて隠れていたけれども、敵に見つかつて首を斬られ、その上に罪人として首が晒しものになりました。保元の乱に自分のしたことが、程なく自分の身の上に跳ね返つてきたと思われ誠に恐ろしいことです。其の事から案ずると、先ず彼の者を死罪に致せば其れが平家に報いを及ぼす心配があり、また成親の行動は朝敵になつた訳でも無いのですから処罰には配慮をすべきです。此処で平家が終りになるのであれば話は別ですが父上はこれ以上に何をお望みなのでしょうか。私は平家が子々孫々まで繁盛することこそが重要だと思いません。父祖の善悪は必ず子孫に及ぶとされて、積善の家（しやくぜん）に余慶あり、積悪の門（しやくあく）に余殃とどまる（しやくぜん）のいえによけいあり、せきあくのかとよおつとどまる善行を積んだ家には子孫まで良い報いが有り、悪行の家には子孫にも災いが及ぶ」と言う中国の諺があります。それらのことを考え合わせれば、此処で（成親の）首を斬ることが有つてはなりません：」

少し長過ぎるようだが兎に角、重盛は道理を尽くして清盛を諫めたのである。清盛も一応は尤もだと思つたので、藤原成親の死罪判決は行われなかつた。原文では「清盛が思い留まつた」とある。其の後で屋敷を出た重盛は、武装した武士たちが集まっている場所に行き「もし、父上が心変わりして大納言を斬れ！と言われるかも知れないが、それに従つてはならぬ。入道（父・清盛）が腹の立つ俣に性急な命令を下しても必ず後で後悔をされることは明らかであ

るから、私は、不法な命令に服した者を重く罰する。それで私を恨むな！」と言ったので、武士たちは震えあがって恐れた。

さらに重盛は「それにつけても、経遠と兼康が大納言（成親）に辛く当たった（二人は手加減をしたのだが）ことは実に奇怪なことである。拷問のことが、此の重盛に伝わることを考えて、なぜ配慮（手加減）をしなかったのか：田舎の武士は、そういう心遣いが出来ないから困ったものだ：」と言ったので瀬尾太郎兼康、難波次郎経遠の兩名は恐れ入るばかりであった。田舎の武士でも都の武士でも、主人の命令には逆らえないのだが、重盛は言うだけ言うと小松殿へ帰って行った。

一方で、藤原成親に従って平家屋敷に来た家臣たちが中御門烏丸の屋敷に逃げ帰るようにして主が逮捕されたことを告げたから、奥方以下の女房たちは驚きと不安とで声も枯れるほど泣き叫ぶしか無かった。此の時に、逃げて来た家臣は平家の軍勢が成親の屋敷へ押し掛けてくると思い込んで「既に（平家の）武士が此方に向かっています。少将殿（成親の嫡男・成経を始め若君たちは捕らえられると聞きました。急いでお逃げ下さい）」と言ったのだが、実際に捕らえられたのは鹿ヶ谷謀議に加わった成経だけで、家族に害は及ばなかったのである。成経の逮捕については次の章段で特別枠が準備されているが、成親の妻は知らないから途方に暮れるばかりである。直ぐにでも平家の追手が来ると思うと恐ろしく「今は夫や息子と引き離される身になって、私だけが無事に逃げて何になるう：助からない身ならば同じように一夜の露と消えようとも其れが本望であるが、今日限り別れ別れになることを知らなかったことが悔やまれる：」と座敷の中で身悶（みもたえ）しながら泣

き叫ぶばかりであった。

それでも捕らえられて屈辱的な目に遭わされることを思うと嘆いてばかりも居られず、その場に居た十歳の女兒と八歳の男児を牛車に乗せ、僅かの供が付いて何処へとも無く逃げることにした。出発はしたものの牛も行く先を言われていないので、適当に走り出してから取り敢えず平家屋敷の方へ行こうとして思いきり尻を叩かれた。気の毒に：何処へ逃げるか当ても無く放浪した末に牛車は京都を北上して北山辺りに着き、雲林院と言う寺に匿って貰うことにした。成親の家臣たちは其処の坊舎に母子を下ろし、自分たちも是からの身の振り方を考える為に暇を貰って去って行った。

成親の家族は力の無い者だけが残されて、尋ね来る人も無い有り様で北の方（夫の）心中を推し量れば誠に哀れである。暮れて行く景色を見るにつけても、夫である大納言の露の命が此の夜限りであると思うと心が消え入るばかりであった。また主人が捕らえられ、家族が逃げてしまった藤原成親の屋敷では、残った家臣や女房が多かったけれども誰も呆然としていて散らかった物を片付けるでもなく、門を開くでもなく馬屋、牛舎に繋がれた動物たちに餌を与えるでもなく（繋がれた牛馬は逃げることも出来ず）誠に悲惨な情景が展開していたのである。

昨日まで、この屋敷には馬車・牛車が立ち並ぶように来客が訪れており、それらの者は我が世の春を謳歌するように遊び戯れ、舞い踊り、平家一門では無いが思い上がって世間を憚らず、権勢を誇っていたのであり、その為に近所の人たちは迷惑を受けても大声で非難することも出来ず（法皇の近臣で平家一門の縁者であるから恐れおののいて遠目に見ているだけであった。それが一夜にして罪人として追われる身に

替わった。

これぞ正に「盛者必衰の理（しょうじゃひつすいのことわり）」が目前に顕わされたことになる。この言葉は巻一冒頭にも出ているが、此の場合は「楽（たのしみ）尽きて悲（かなしみ）来たる」と言う江相公（こうしょう）より二十年ほど後に活躍が書かれた文書にある言葉でそれを、今こそ思い知らされたのである。

題名の割には中途半端であるが「小教訓」は此処で終り、次は「少将乞請（しょうしょうこいげ）」になる。この少将とは藤原成親の息子で母親（成親夫人）が牛車で逃げながら心配をしていた人物である。余計な詮索をすると、父親のほうは「西光被斬」と「小教訓」とで序のように扱われているのに息子の丹波少将成経は天下の「平家物語」で一つの章段を与えられている。尤も平家に逆らった罪人としてはあるが：種明かしをすれば、成経が死亡したのは四十七歳であり平家に捕らえられたのは二十代であるから母親が余計な心配をしなくても良かったことにはなる。ただし罪人であるから、それなりの苦勞はした。（続く）

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>

ふるさと風の会会員募集中!!

会報「ふるさと風」も、お蔭様で創刊100号を迎えました。

ふるさと風の会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くこのふるさとを自慢したいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

風の言葉絵同好会参加者募集

全てが自由で自在であれ、のふるさと風の会から生まれた、兼平智恵子の風の言葉絵。この新しい自分表現の「風の言葉絵」を楽しむサークルでは、一緒に言葉と絵を楽しむ参加者を募集しています。

詳しくは、兼平智恵子(☎0299-26-7178)へお問い合わせください。

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

ことば座「朗読教室」受講生募集

朗読は演劇です。

朗読とは、物語を読み聞かせるのではなく、声に劇しく(はげしく)心を演じることです。

物語とは、はじめに言葉があって紡がれたのではなく、はじめに作者の心があって言葉に紡がれたものです。物語(詩)を朗読に表現する時は、言葉に紡がれた作者の心の真実をうけて、表現者として劇しく(はげしく)そのドラマ(物語)を演じることが必要です。

何かで自分表現をしたいと考えておられる方、朗読による自分表現を考えて見ませんか。

演劇表現としての朗読の基礎を学び、朗読で自分表現を、また朗読で「ふる里の歴史・文化」をつたえて行きたいとの思いのある方、連絡をお待ちしております。

月二回程度の授業を考えております。(受講料月額3,000円)

脚本・演出家の白井啓治がに指導します。

連絡先 080-3125-1307(白井)